



TITLE:

2)「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔大学院GP〕採択：心理臨床における箱庭を介したかかわりに関する研究--特別養護老人ホームでの調査から-

AUTHOR(S):

加藤, 奈奈子; 角野, 善宏; 大石, 真吾; 佐々木, 麻子; 山本, 尚代

CITATION:

加藤, 奈奈子 ...[et al]. 2) 「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔大学院GP〕採択：心理臨床における箱庭を介したかかわりに関する研究--特別養護老人ホームでの調査から-. 研究開発コロキウム：平成19年度 成果報告書 (Colloquium for Educational Research and Development) 2008: 44-45

ISSUE DATE:

2008-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/143076>

RIGHT:

心理臨床における箱庭を介したかかわりに関する研究

—特別養護老人ホームでの調査から—

A study of interaction through sandplay in Clinical Psychology.

—from the research at a nursing.

研究代表者 加藤 奈奈子 (D2) 教員 角野 善宏
研究分担者 大石 真吾 (M2) 佐々木 麻子 (M2) 山本 尚代 (M1)

〔研究目的〕

近年、学校現場・医療福祉現場など様々なフィールドに入り心理的援助を行う専門家が
必要とされているが、その要請を受けて心理臨床とは異なるフィールドに入ったもの
の現場の職員の理解が得られず孤立し、心理的援助を行う以前に自らの役割を果たす場
の構築に苦慮することは少なくない。こうした問題に指針をあたえるのが、本研究の母
体となる箱庭療法研究会が行った特別養護老人ホームにおける高齢者の継続箱庭制作
調査である。この調査では、研究会が持ち込んだ箱庭が、作り手と調査者である見守り
手間のみならず、調査者と施設の間をもつなぐ“つながりの要”として機能していたこ
とが報告された。このかかわりという側面から見た箱庭の機能は、箱庭がもたらす新た
な可能性であり、このような可能性を様々な角度から検証することによって、実際に施
設に入っていく方向性を定め、土台を固めることができるだろうと考えられる。よって、
箱庭療法を様々な角度から検証すること、さらには、より施設に沿った入り方の方向性
を見出すことを目的に研究を進めていくこととする。

〔研究経過〕

具体的な検証としては、大きく三つの研究企画に分けられた。まず、「アイテムの製
作体験と製作したアイテムを用いた箱庭制作体験」を行い、箱庭で使用するアイテムの
特徴やそれが持つ力について検証するために実施した。次に、高野祥子先生（高知心理
療法研究所所長）をお招きしての「事例検討会と高知に赴いての石拾いと箱庭制作体験」
を行い、臨床事例の検討を通じて、箱庭に対する知見を深めるとともに高野先生の箱庭
に対する考え方に触れた。さらに、高齢者の箱庭制作やグループによる制作について述

べられた文献や発表に触れることで、実際に施設に入っていく際の方向性を見出した。それと同時並行に施設への訪問を行うことによって、施設の要望と研究会の方向性に沿うような入り方を模索していった。

〔研究成果〕

①アイテム製作体験および製作されたアイテムを用いた箱庭制作体験に関して

集中してアイテム製作を行う中で、そこで生じる困難さを実感させられるものでもあった。ここでの困難さは、「箱庭のアイテム」に思い馳せつつ、「アイテムそのもの」に向き合うという二重の作業に取り組んだ結果であるとも考えられ、アイテムが持つ二つの側面や力に対する気づきが得られた。

②事例検討会・高知訪問に伴う「石拾い」および箱庭制作体験に関して

事例検討会によって事例が持つ圧倒的な迫力に触れ、臨床事例においてどう箱庭を捉えるか検討することができ、今後も検討会を通じて各自が事例を読み解く力を身につけつつ事例に学ぶことの必要性を感じられた。さらに高知訪問では、アイテムとなる石を拾うことなど、自然とつながるような体験を経て、土地が持つ力を含めた箱庭制作環境をどのように考えていくかということが検討された。

③文献講読・施設での実践に向けて

グループ制作について扱っている文献や報告を研究会で取り上げることによって、これまでの箱庭制作の方法とは異なる形を視野に入れ、考えをめぐらせた。また施設へ訪問することによって、施設職員が多忙である現状も考慮した“レクリエーション”としての入り方を施設側から提案していただいた。この“レクリエーション”という形は、我々が考えていた、より相互に主体的にかかわるあり方と合致するものであり、この方向で実践を推し進めて行くことを結論付けた。その際、従来の箱庭療法の方法を闇雲に排除するやり方でなく、その可能性を見据えつつ、内的枠組みを作っていくことを調査者が意識することが肝要であることを再確認することとなった。

④全体を通して

箱庭の可能性を様々な角度から検証することによって、従来あまり議論とされてこなかった基本姿勢について再考することとなった。今回見出された方向性によって施設での実践を行っていくことが来年度の課題であり、それによって今年度の活動を生かせることになるであろうと思われる。

〔研究分担者・研究協力者〕

千秋佳世 (D2)・小西佳世 (M1)・高橋優佳 (M1)・西浦太郎 (M1)・森崎志麻 (M1)
浅田剛正 (D3)・清水亜紀子 (D3)・佐藤健 (M2)